



くつろぎの水と地域研究

佐藤 次高 「イスラーム地域研究」代表、早稲田大学文学学術院教授

アラビア語の史書を読んでいると、ごくまれに社会の実相や人の心の内側を映し出す言葉に出会うことがある。例えば、一一八七年、サラーフ・アッディーン（サラディン）が長年の苦勞の末にエルサレムを奪回したときのこと、バグダードのカリフ・ナースィルから届いた手紙には、暖かいねぎらいの言葉の代わりに、次のような

非難と敵意を込めた冷たい言葉が記されていた。「なぜそなたはアッバース朝カリフの公式名であるナースィル（サラーフ・アッディーン）の称号は「ナースィル王」の名を勝手に使ったのか」、また「エルサレムはカリフの軍旗のもとで解放されたのではなかったのか」（イブン・ワースィル『悲しみの除去』）。このときサラーフ・アッディーンが味わったはずの驚愕と深い失望の気持ちを思うと、慄然とする。

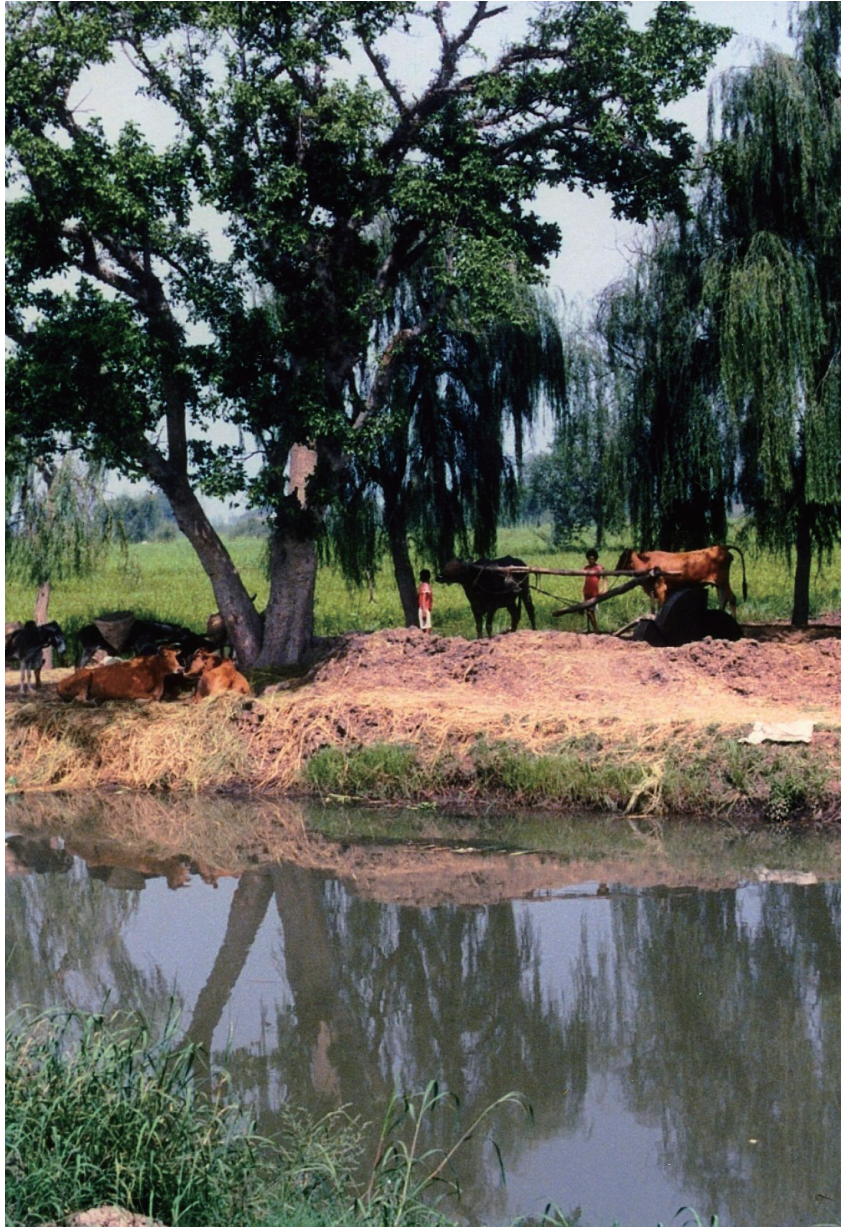
『砂糖のイスラーム生活史』（岩波書店、二〇〇八年）を書いているときにも、次のような味のある表現に出会うことができた。ただし今度はいいい意味での事例である。書物は、マムルーク朝時代の知識人ヌワイリー（一二七九―一三三三年）が著した『学問の究極の目的』三三卷、ここには当時の知の体系が、天と地、人間、動物、植物、歴史の五部に分けて整然と記されている。そのうちの第二部「人間」のなかの一章に、上エジプトのクース地方で行われていた砂糖きび栽培と製糖法についてのくわしい記述がある。唐代以来の長い製糖史

を誇る中国でも、これだけ詳細な記録はないとされている。そのなかの一節に次のようにある。

桶による灌水の合計は二八回であるが、ナイル川沿いの揚水車（マハーラ）を用いてきびを育てる慣行は以下のごとくである。ナイルが増水したら、きびに「くつろぎの水（マー・アッラーハ）」をかける。つまり灌漑土手の反対側を切つて、隘路から水が流れ込むようにする。このとき水は地表に一シブル（約二三センチ）の深さまで溜まるようにすべきである。ここまですり込まれたら、水が暖かくなるまで二、三時間放置し、その後、土手の反対側から排水を行う。こうしてまた新しい水を入れて灌水するが、この作業をきびが成長して必要がなくなるまで、一定の日数をおいて繰り返す。

ここで用いられている「くつろぎの水」は、著者ヌワイリーの表現ではなく、おそらく地域の農民たちが古くからいい慣わしてきた呼称であろう。灌漑水を人間の側か





下エジプトの運河と揚水車

詩人はいう。「エジプトでは水の流れる運河は、^{かね}金の流れる運河と同じである」
(スューティー (1505年没)『エジプトの魅惑』)

らではなく、砂糖きびの側に立って「くつろぎの水」と表現する感覚。この表現の仕方から、私たちは砂糖きびの成長を見守る、農民たちの暖かいまなざしを感じ取ることができはるはずである。

砂糖きびにいつときの「くつろぎの水」を与える農民たち、こう考えると、「自立性」や「個性」がないと思われてきた歴史

のなかのエジプト農民のイメージも、にわかに生彩を帯びて動き始めるような気がしてくる。いま私たちは、現地の研究者と共同して国際的な「イスラーム地域研究」を進めている。共同研究の仕方はさまざまに考えられるが、私たちが現地の研究者から学びたいと思うことの一つは、この「くつろぎの水」の感覚ではないだろうか。外側だけから観察していたのでは分らない、

地域社会に生きる人々の考え方や行動の仕方を知ることがまずもって大切であろう。この意味で、現地研究者との共同作業は、これからますます重要なものとなっていくに違いない。これに加えて、共同研究の成果をどのようにして「地域の人々」に還元することができるのか、という問題にもそろそろ真剣に取り組むべきときがきているように思われる。